
アカンシャス・ワールド

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカンシャス・ワールド

【Zコード】

N2176D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

悪夢を食べて生きる生命体である、恵。少女はアカンシャス・ワールドのプリンセス候補。そして私は、彼女に拾われた、悪夢を食べれない女、絵夢。人間界に降りての修行も残り一週間の期限。そこで恵の身に事件発生！その鍵はどうやら、アカンシャス・ワールドのプリンス候補が握っているらしい？！ちょっとラブ物SF・ファンタジーです。

#1 生まれ故郷

夢の始まりは突然始まり、夢の終わりは突然終わる。そしてその性質は刹那に自らの本心を映し出す。それが、夢。だから、静寂の暗闇の中私は願う。自分の本来の姿を……

アカンシャス・ワールド。そこが私の生まれた世界。暗闇に閉ざされた妖艶で、何とも残酷な世界。私の今までの印象はこれだった。私は、此処で生まれ三歳の時に親に見離され捨てられた、孤独な子供だった。

この世界では、ありとあらゆる者達の悪夢を喰らい、そしてそれを糧として知能を得、生きながらえていくことが出来る。しかし、私は生まれながらそれをすることが出来ない、稀な異端児だった。だから、ついに母に愛想をつかされて眠っている内に森深くに捨てられた。正しく言えば置き去りにされたのであった。そこは姥捨て山ならぬ、孤児捨て森。

別に恨んでなんかいないさ。これが私の背負つた業なのだから。小さいながらにそんな冷めたところが有る子供だった。

夢を喰らうことが出来ない者には、額に星型の黒子ほくろが生まれながらに刻まれている。その理由は依然として判らない。何故そう言う運命として生まれるのかを。

そして、当時そう言う者達にはそれを補うための、特別な薬が出回っていた。しかしそれは法外に高いものだった。只でさえ、家計に余裕の無い貧乏な私の家でそれを購入することなど出来はしなかつた。町外れの小さな村に住んでいた私達家族は、一一ツイーという下級階級の家系だった。

それでも、始めは母に愛されていたのだと思う。その貴重な薬を買って来て私に飲ませてくれていた。だけど、それは一週間の飢えを補うだけの虚像。何の改善にもなりはしない。そんな事にお金を

使うのが勿体無かつた。だから、母は耐え兼ねたのである。母にだつて父、私の妹という家族を養うためのちゃんとした生活設計が有る。そう、私は只の母の枷に過ぎなかつたのだから。

あの暗く腐臭のする森の中、私は一週間當て所もなく這いすり回つた。それは生きることを放棄することが出来なかつた。と言うわけではなかつた。何かに取り憑かれていただけかもしない。飢えというものを只、どうにかしたくて足搔あがいたと言つただけだ。そして、ついに動くことが出来なくなり、森の出口近くで体を丸め蹲つていだ。涙も出やしない。いや、元々泣くと言う事が出来無かつたのだけれど……もう力も無く、暗闇に息を潜め只そこで最期の時を待つていた。

しかし、そんな私を見つけてくれた子がいた。同じ年位ではなからうか？丸くて大きな瞳を見開いて、こう問い合わせてきた。

「あたしのところにくる？」

と、私は、それがどういう事なのか？理解出来なかつた。それだけ意識がハッキリしてなかつたのだろう。多分、私は頭を縦に振つたのではなかろうか？そうでなければ、次目が醒めた時、あんな豪華な屋敷のベッドに身を委ねていたりするはずも無いのだから……

「惠様けい？お邪魔いたします」

十五歳の私は、今地球と言つ悪夢の宝庫、三次元の世界で、私を助けてくれた惠様と共に社会勉強のため修行体験をしている。

私は絵夢えむ。そう名付けられ惠様と共に何不自由なく育てられた。惠様の家は、アカンシャス・ワールドで言うところの、ノウブル（貴族）であった。だからその後、あたしはそこで惠様付の表向き、お抱え侍女として生活することとなり、生き抜くことが出来たのである。

そして、この修行は、惠様のノウブルで行われる極秘の、数少ないプリンセス修行でもあり、私はそのお供。惠様を主人として共に

この地球に降り立つた訳だ。

期間は一年間。後、一週間でその修行を終えることとなる。この

まま何事も無いことを願いつつ私は毎日生きていたりもする。

私は、北山絵夢きたやま えむと名乗つていて。恵様は、都築惠つづきけいと名乗り、私の隣の家に住んでいる。

流石に、地球での無意識界を改造するのに（悪夢を取り込む事は出来ずとも、無意識界を変化させることは出来るよう学習してきた）一人同時に同じ家の子として存在することが出来なかつた。その為、お隣同士で落ち着いたのである。

そして、この世界の高校と言つ所に私達は共に通つてゐる。残り一週間で此処ともお別れ。私は、恵様のお目付け役なので、無意識界を操り同じクラスで恵様を見守つてきた。

澆淵として、元気一杯の恵様は今のところ何も問題は無かつた。この世界でも恵様は「ロロロ」とよく笑つてゐる。プリンセスとしての要素を得るのにも最適のはず。恵様に必要な物が何なのか？それは私には判るはずも無いのだが、でも、恵様が笑つていられることが一番であると信じてゐる。そう、何も問題は無かつたはずなのであつた。

「あら。もう、そんな時間？」

一階の窓際から私が顔を覗かせた事で、恵様はいつもと変わらない様子で私に問い合わせられた。

「宿題ですか？」

私はベランダを下り、恵様の部屋へと入つた。いつもの日課で訪れる時に恵様が勉強をされていて驚く。勉強お嫌いなのに、

宿題？

「うーん。そんなところへ、悪夢の補給ね？」

「はい……いつもお世話になります」

悪夢は、お昼の間に睡眠をとる形で得たモノを頭に蓄積した恵様から独自の方法で補給する形を取り、それを受け渡して下さる事

で私の精神は生きながらえている。

受け渡し方法としては、ニイーディー生まれの者は、ノウブルの者とおでこをくつつけ、その者が念じると、自然と補給することが出来るのである。そして、これを一日一回夜にしている。別に、毎日しないといけない訳では無い。一週間に一回で事足りるのではあるが、集中力が衰え、衰弱してしまう恐れがあるからと、恵様から、きつく毎日の日課として私に義務付けられた。とてもありがたい事である。

だから私は、恵様には頭が上らない。でもそれは、生きていくために必要だからとか、同情心を搔き立ててくれる御節介だとか決して思ってはいない。心の底から尊敬し、また個人的にも愛らしい恵様に敬意を表してのことである。

「どう? 今日の悪夢は?」

この悪夢補給が済んだ瞬間、目の前に有った恵様の丸くてパッチリとした瞳が大きな臉に包まれにつこりと微笑んだ。そして、

「悪夢って、同じものが無いから、味も様々だよね? 本当に飽きないわ~」

コロコロと笑いながら、私に向かつておっしゃった。黒い髪にショートヘア。恵様の個性そのものが私の目の前にある。それが私がいつての一時の幸せだつたりもする。

「ありがとうございました」

お辞儀をし、部屋に戻ろうとした。しかし、踵を返した次の瞬間、私の心を凍らせる一言が恵様の口から発せられたのである。

「あたし、アカンシャス・ワールドには帰らないから~!」

私は一瞬瞬きをして、その言葉を頭で繰り返した。そして一言、

「……え つ！」

引き返せない展開に突入してしまったのであった。

その日の夜は眠れなかつた。この事を、どう報告すれば良いので

あらうか？プリンセス候補生である恵様の付き人としてこの地球に送り出して下さった、お優しい恵様のお父上と、お母上。そして私の任務が遂行できない事態。

恵様の、お気軽な発言と重大任務。どちらも大切なこと。でも何故？恵様は帰りたくないのだろうか？それとも、この地球上に何かしら興味でも持たれたのであるうか？

結局、恵様は真実を話しては下さらなかつた。でも、見た感じから察するに、目を輝かせて、夢見がちな瞳をしていたこと。その辺りに何かあるらしい。そして、眠れぬ夜を過ごし、報告も愚か、私は悶々と頭を働かせる羽目になつたのである。

朝は、腫れぼつたい目をして私は、いつもと同じく恵様と共に、高校に登校した。

廊下を歩く際、人懐っこく明るい恵様に声を掛けてゆく女生徒達数人。そして、その先に井戸端会議をしている者達の群れと遭遇。

「うわあ～」

隣で、恵様が何かを見つけて嬉しそうな声を発せられた。私は、何事だとその先を見た。

そこには、この学校のアイドル的存在で有名な？すきひいあつじ杉浦厚史すきひいあつじと、前まえ園霧そのきりと人の両名がいてその周りに生徒がたむろしていた。私はこの二人を敬遠したい類としてみていたりもする。

「げつ……」

しかし、恵様はその様子を興味深そうに見ていた。もしかして、どちらかを好きにでもなつたりとかしてたりしませんよね？恵様？一瞬不安が頭を過ぎつてしまつた。仮にもあなたは、今年度のアカンシャス・ワールドのプリンセス候補生なのですよ？判つてらつしゃいますか？私は不安げに背の低い恵様を見下ろした。でも、その事に気づくことなく、恵様はその団体に目を見張させていた。

そうだな。私が独自に解析すると、杉浦という少年は、学年一のワンパーク坊主。ちょっと癖つ毛氣味の黒い撥ね髪と、垂れ目氣味の

大きな人懐つこい瞳。そして、いつも顔に絆創膏を貼つている落ち着きの無い少年であり、バスケットが得意でスポーツ全般は何でもこなし、男子の間で特に注目を浴びている。

まあ、親しみやすいキャラだとは思う。勉学に関しては、そんなに良い評価を得ていい気がしない。恵様と張り合える位の知性度だと思われる。そんなところが彼への見解だ。

そして、もう一人。前園と言つ少年は、文武両道、品行方正。シヤープな瞳と顔の輪郭が二ヒルなイメージをかもし出し、特に女生徒に優しく落ち着いた物腰をしている。それもあり、女生徒の憧れの的。まあ、私が見ても特に悪い所は見受けられないが、それでも、地球人だからとしての見解を置いて考えると、恋愛対象に値はしない。

そんな正反対の二人。しかしこの二人はつかず離れずいつも行動しているので、より目立つ存在だつたりもして人気が高い。休み時間を利用して、友人達はこの二人に逢いに来ていたりもする。

そう、私と恵様はこの二人と一緒にクラスだつたりもすることを忘れてはならないことだつたりして……

そんな中、ホームルームの予鈴チャイムが鳴った。

「で、あるからして……つと……またですか！」

授業は三時間目の数学。担当の教師が眼鏡をズり上げ、ある者に目を光らせた。

私は、それがいつもの事だと判つてはいたが、仕方ないと視線を送つた。

恵様が、私の為に悪夢を補給するための居眠りをなされていたのであつた。

私は、無意識界を作用させる為いつものように、手を上げようと右手に意識を馳せた。しかし、この時それを阻む者がいたのである。「はいはい、先生！都築さんは、体調が悪いそうで、俺が保健室に連れて行きます！」

元気で少しハスキーな声が教室に木靈した。それは、恵様と特別面識が有るわけでも無い、あの、ワンパク坊主の杉浦厚史であった。

「な……」

私が何かを言つ前に、既に杉浦は恵様をおんぶして教室から抜け出していた。

勿論、教師も、クラスの皆も、コンビで名を売つてゐるもう一人の前園も目を疑うようにその行動を見守つた。誰も口を挟めなかつた。それだけ有り得ない構図がそこに有つたからである。

私は、この三時間目を終えるとすぐさま保健室へと走つた。そもそものはず、あの杉浦が、結局あの教室に戻つてこなかつたからであつた。

『バンツ』

思いつきり、扉を開き中へと急ぐ。心配で形振りなど構つていらぬなかつた。

保健室には、先生らしき者は居なかつた。その代わり、白いカーテンがベッドを囲むように閉じられていた。

私はその奥に、杉浦の足首を発見した。

「ちょっと、あなた！恵様……恵に……何かしなかつたでしょうね！」

カーテンを『シャツ』と開くと一瞬、主従関係だとバレてしまいそうな言葉が出そうで言葉を直した。

「ん？え～と、北山さん？だつたつけ？」

私は、パイプ椅子に座つてゐる杉浦の襟首をつかみ上げそうな勢いで突つかかっていたのに、杉浦はのほほ～んとした顔で、そんな質問を返してきた。

「え……そうよ。あの、何かしてないでしょうね……」

出端をくじかれた氣分になつて、私は躊躇つてしまつたが、こいつのペースに合わせるのも癪だから、もう一度話を戻した。

「都築さんならグッスリ休んでるよ？よほど疲れてるんだね？」

私の問いかけとは関係ないことをゆつたりとした口調で話しかけてきた。だけど、これにはちょっと心に『グサリ』ときた。ま、疲れてるわけではないけれど、恵様が昼間こうやって睡眠を取るのは私のせいだから……私には特別何かをして差し上げる事も出来やしない。そんな気持ちで凹んでしまった。

「厚史！」

言い返す言葉が無い私と、杉浦の間に割つて入るよう、前園が静かに現れた。いつ入つて来たのか判らない位、ひつそりと。そして、一気に杉浦の元へと前園は足を伸ばしていく。

「お前は、授業サボつてこんな処にいるなんて、どう言うつもりなんだ！いい加減、勉学に励め！そう言う事だから、成績が伸びないんだ！」

こちらは、命令口調。何なんだこの二人の関係は？仲が良いのは無いのか？端からはこういう所を見かけたことがなかつた。だから、私は呆気に取られてその場に突つ立つて、そのやり取りを聴いていた。

「だつて、数学つまらないんだもん！霧人のその横暴な勉強への勧めつて俺、いい加減勘弁して欲しい~~~~~」

言うや、杉浦の首根っこを捕まえて前園は教室に戻るように促していた。杉浦はそれでも抵抗してズルズルと保健室の外に引きずられて行つた。

「あ~~~~都築さんに宜しくって言つておいてね？北山~~~~ん！」

「黙れ！馬鹿者！」

嵐の様なドタバタがそこにあつた。『ピシャリ』と、保健室の戸が閉まる音が室内に響く。

私は、杉浦と前園のその行動の果てに有るものが理解できなかつた。こういうモノなのだろうか？地球人という者は？判らない……でも、杉浦はやはり変人だとそう思つてしまつた。そして、この件はもう忘れて流そうと心に誓つた。

それから私は、静かな寝息を立てていてる恵様が横になつていて、ベッドを見た。

「すみません。恵様……本当に？」迷惑をおかけしてしまって……」
健やかなその表情を眺めながら、私は恵様の額にそっと手を乗せた。それでも恵様は目を開くことなく休んでいらっしゃる。そんなのどかな時間を遮るように、四時間目の授業の予鈴チャイムが鳴つた。

「また、後程参りますね？」

私は、心を込めてそう呟いた。

しかし、いつもなら起きていてもおかしくない時間帯。多くても三時間すれば起きてるはずなのに……

恵様は、保健室からこの教室にお戻りになられなかつた。私は、昼食の間中恵様に付き添つた。様子を窺いながら片手に弁当を抱えて食べた。勿論恵様のお弁当も、お持ちした。その時は、何もいつも変わらない様子であつた。

しかし覚醒なされないので、五時間目の休み時間を利用しようとした。それまでにはきっとお戻りになられるはず。そう思つていたのに、姿をお見せになられなかつた。

余りにも不自然すぎる。私は、不安が募つた。そんな気持ちの六時間目。手元の時計型アカンシャス・ワールド通信機器のアラームが鳴つた。

これは、地球人には聽こえない周波数のもの。なので、私以外には聽こえるはずも無い。私は、時計型通信機器の発信指令を見た。文字盤に書かれている文字。これは、地球人が使つてはいる、携帯のメールのような物と言つたら判つてもらえるであろうか？それには次のような事柄が記されていた。

『アカンシャス・ワールドに異変。眠りに就きそのままになる者続出。悪夢に何かの原因が隠されている模様。その原因を突き止め、

そして、アカンシャス・ワールドの未来を取り戻せ!』

『この文字を見た瞬間、私は背筋に冷たい物が流れ落ちた。それは、もしかしたら、恵様にも関係があることなのかも知れないから。私は直ぐに、この事例の返信を行つた。勿論、恵様のお父上に向けて。

『恵様が起床なされません。追つて連絡をお待ち申し上げます』

それに対する返信はこうだつた。

『今地球に、プリンス候補生が舞い降りている。その者が原因究明の鍵を握っている可能性がある。時機を見て、その者を捜し出して、可能性を見い出すよつて。絵夢の手にこの事を委ねる』

プリンス、候補生?

私は、その文字を何度も反芻した。この地球の一体何処に!アカンシャス・ワールドは狭い。地球の一万分の一しかない。だから、それを考えると眩暈がした。地球の広さと来たら尋常では無い。只でさえ、昨日は寝ていない。ガンガンする頭と、どうしすれば良いのかの不安で一気にこんがらがつた。

落ち着け自分!

とにかく、私は此処にいるべきではないと察知し、右手を操り無意識界を操作した。

教室は、私を除く皆を置き去りに、授業を進めていく。そのはずだった。しかし、一人。そう、事もあるうにあの厄介な杉浦と前園を残し空間が歪んでしまつたのであつた。

#1 生まれ故郷（後書き）

短いですが、章に区切ってみました。
もし宜しければ、このままお読み頂けると幸いです。

#2 プリンス候補生

「どうして、あんた達が此処に居るのよ!」

私は、もう訳が判らずに問いかけていた。それはそれは、かなりきつい視線を向けていたことに違いない。余裕が無かつたためである。今すぐ、こいつらの記憶を改竄（記憶を書き換える）しようと意識を飛ばそうとした。しかし、

「北山さんって、やつぱり、アカンシャス・ワールドの人だつたんだね？」

杉浦が、当たつてた！という表情でにっこり微笑み、私に言った。

「な……」

言葉に窮している私に、

「厚史……お前は自覚つて物が足りない。そうポンポンと言つても説明がつかないであろうに……」

前園が、詳しく説明をしようと私に視線を送った。

「僕達は、アカンシャス・ワールドの秘密特別捜査隊の者なのです。突然、アカンシャス・ワールドから指令が出たので、その捜査をしようという段階なのです。北山さん？貴女がこれから成すべきことは、きっと僕らと同じことなのでしょう？だから、無意識階層を操つた。そして、その周波数に僕達も乗らざる負えなかつた……ならば手を貸して頂けませんでしょうか？その方が、実際、事を荒立てなくてスマーズに行く」

秘密特別捜査隊？私はそんなものが存在していることなど知りもしなかつた。本当なのであるうか？でも、実際こうして私達三人はこの半異次元空間にいるのだ。信じるしか無いのかも知れない。

「話は判りました。しかし、私の使命は、アカンシャス・ワールドのプリンス候補生を捜し、そして、この状況を開拓する命を受けてます。それを念頭において頂きたくそう思います」

そう。私の使命はこれだ。だから、こいつらに手を貸すのは少な

からず無いであろう。

「あ、それなら、プリンス候補生は俺……モガモガ……」

杉浦が嬉々として何かを言いかけた。が、それを前園が真後ろから羽交い絞めるかのように口を掌で遮った。

「何？心当たりでも有ると言つの？」

「何もございません」

前園は、紳士的な面も有るが、どうも杉浦に対してだけは有無を言わせない何かが有るらしい。

「で、これからどうしますか？僕の兄が、この地球で管理職に当たつてます。是非、北山さんも合流しませんか？あなたが遂行しようとしている事柄も僕達の使命と同じ点を通る事になりますから。同じ、アカンシャス・ワールド救済に力を注ぐのも一考かと思われますよ？」

「にこやかに、そしてその裏、何かが有るかのようになつた前園の顔は、私の心に何かをもたらした気がした。

「そう。判つたわ。なら、そのお兄さんとやらのところに行きましょうか？」

「一体誰なのであらうか？」の学校でそんな組織を密かに運営しているなんて……

「そう。おかしなことが続く。杉浦、前園、そしてその兄。偶然にしては出来すぎている気がする。」

しかし、他に手も無く、私は元に戻った次元で前園の進む後に続いた。

「こには……」

着いた先。私は目を見張った。何と、保健室であったからだ。

「一年B組の北山さんですね？」

田の前に、前園と瓜二つの顔が並んだ。兄と言つから、似ていてもおかしくは無いのだけど、ここまで似ていると不気味な気がした。ただ、長髪で髪を後ろで結んでいるところだけが違う。あ、それと

身長もか……

その者は、保健室の住人。基い。保健室の先生であった。私が利用して無かつたから、今まで知らずにいた。全くの初対面である。「都築さんは、悪夢に取り憑かれたまま就寝中です。やはり、気になりますか？」

当たり前だろう！と言いたいところだけど、それはご法度。それに当たつてはいるだけに、その事に關しては言葉が紡げなかつた。仕方なく、今のありのままを説明した。

「これから的事も有りますし、事態の把握をしなくてはなりませんね？まず、悪夢開放の打開の鍵は、私に入った報告で述べると、プリンス候補生である者が握つてはいるとの事。その辺りは、貴方達、秘密特別捜査隊？の方が詳しいと思われますが？如何に？」

私は、話を振つた。

「だから、プリンス候補生は～～～モガモガ……」

杉浦の口を、また前園が塞いだ。

全く何なんだ！言いたい事言わせれば良いじや無いか！不審げにその行動を睨み付けた。

「プリンス候補生は、名乗りを上げることが出来ない仕組みになつてるのは、ご存知ですか？勿論その側近も。暴かれた場合のみ有效。それに関しては、プリンセス候補生に於いても同じはず。その辺りは北山さんもご存知のはずでは？」

前園兄は、そう言って私の肝心な質問を却下した。それは、此処に居る私が恵様のどちらかがプリンセス候補生だと見抜いているからであろう。

だけど、実際には、恵様がプリンセス候補生だとバレていると思われる。それは私が尋常ならぬ態度をこの部屋で、杉浦の前で、一度取つてはいるからであつた。

それに、この一年間毎日、恵様の居眠りの際、無意識界を操作しているのに感づいてはいたはずだ。同じアカンシャス・ワールドの生まれならば……気付いてはいるはず。杉浦、前園両名についてそう認

識できた。

「ならば、私自身がその者を捜すしか他なりませんね？」「こういう事態であるのに、その情報源が無いとなると、これほど難しいことは無いのですが……？」

疲れている演技をしてみる。お涙頂戴の演技。こいつ言つ時こそ女の強みを押し出す。すると、こいつ言つ返事が前園から返ってきた。「僕達は、秘密特別捜査隊です。とだけ言つておきますよ？でも、ここに居る者に、プリンス候補生が居ないとは言つてません。北山さんが暴かない限りは、それ以上のヒントを与える事は出来ませんしね？」「

その言葉に、ふと、杉浦を見た。このアホ面が、プリンス候補生のはず無いし、前園なら有り得るけれど、こいつを突くのは難しそうだ。兄の方は、どう考へても有り得ない。

候補生は、十五歳の少年であるはず。今年度のプリンセス候補生と同年齢のはずなのだから……

偶然のアカンシャス・ワールド人と遭遇。そして、秘密特別捜査隊。本当に余りにも出来すぎている。ならば、やはり杉浦か、前園のどちらかだ。私は一人に絞り込むことにした。すると、

「わたくし達は、もう、気がついてますよ。プリンセス候補生が誰であるのか？その辺りは、北山さん？聰明な貴女には理解できるはず。手の内はわたくしたちが握っているのです。でも、これを報告する義務は勿論ありません。そこまでわたくしたちは冷酷では有りませんから？」「

前園兄はそう言った。ちょっと歯がゆいけれど、仕方が無い。これも全て私の落ち度だから。しかし、一体何を考えているのであらうか？この者達は？

秘密特別捜査隊が聞いて呆れる。仕事はどうするってのよ！毒づきたかつたけれど、冷静な表情を装つた。そんな態度に出たら、恵様の品格を損なう恐れもあるし、見苦しい。私のミスであるのだか

「そう、誰か判つてていると言うならば、今度は私が、誰がプリンス候補生であるのか？を、見定めれば良い訳ね？私は、杉浦くんか、前園くんのどちらかがそうなのだと思っている訳よ。だったら、それを暴いてみせる！今日は、このまま恵様を保健室に預けておくわ。不安は有るけど、そうするしか出来ないし。これから、無意識界の秩序を上手く操り、地球での恵様の両親の意識改造を行わなければならぬもの。では、ごめんあそばせ？」

皮肉タップリに言葉を編んで、私は三名の前から姿を消した。この私を嘗めないで貰いたいわ。絶対、暴いてみせる！そう心に誓つた。

無意識界の改造をした私は、自宅でこれから事を考えていた。
プリンス候補生。その特徴は何か無いものか？

プリンセス候補生の場合、体のどこかに紋章が刻まれているのである。それは、生まれながらにあるものであるらしい。特に、ノウブル生まれの中に稀に。そして、それが後々プリンセスの頭角を現すのだと語り継がれている。

恵様は、掌に赤い紋章が刻み込まれていた。時々アカンシャス・ワールドでそれを私は拝見したが、古代文字特有で刻まれている紋章は、意味不明だった。でも、地球ではそれを消し去つている。それを目にしたら地球人は失神もしくは悪くして死を招くからだ。大体、何故プリンセス候補生が、地球に修行しに来るのか？その辺りも謎だ。アカンシャス・ワールドと、地球の間に何か有るのであろうか？謎ばかりの秩序。でも、今はそんな事を考えてばかりはいられない。問題は、プリンス候補生を突き止めること！

「もし、プリンス候補生の方にも紋章みたいな物が有るとしたならば？何処に？でも、消しているとなると、私の力では探す事など出来やしない」

イキナリ思考が途切れてしまった。

とにかく今日は、お父上に連絡を入れて、それから休もう。この

一件どのくらい時間が掛かるだろか？私の悪夢補給が出来ない体で、何処まで保つか？それを考えると、また気分が萎えた。

「恵様。私が何とかいたします。それまでどうか、お待ちください！」

夢の中、私は恵様の笑顔を見た気がした。

『プリンス候補生にも、プリンセス候補生同様、体の何処かに紋章がある。それを見る事が適うのは、同じ候補生のみ。いずれにせよ探し出すように。恵の意識回復を望む』

お父上からの返信はこれだけだつた。全ては私に一任されている。しかし体の何処か？それが、掌とは限らないということなので、私は苦悩した。勿論、私はニィーディー生まれの単なる一般市民だ。プリンセス候補生などでは無い。隠されている紋章を探し出すことなど出来はしない。途方に暮れた。

でも、あの杉浦と前園のどちらかのはず！そう考えると、柄ではないが纏わりついでらうかなと思うしかなかつた。

「さて、行動有るのみ！」

私は、一人で高校へと足を運んだ。

「おはよう北山さん？」

早速、杉浦がホームルーム前の時間帯に私の席に来て接触してきた。何？この馴れ馴れしさ？昨日の今日というのにこの男はどういう神経しているのであらうか？でも、憎む事が出来ない笑顔だったから、私も仮頂面をやめた。杉浦のその表情がちょっとだけ、恵様に似ている気がしたのもあつた。それに、そちらから接近してくれる私も仕事のし甲斐がある。

しかし、よく顔に傷作る男だなと思った。今日は鼻のてっぺんに絆創膏を張っている。

「おはよう。あなたはいつも元気そうね？」

「元気だけが取り柄だもんね！」

本当にその通りだ。なんて不覚にもクスリと笑ってしまった。

「今日はあいつとは一緒に無いの？前園くん。それにしても、いつも杉浦くんとはあんな感じなの？接し方の事だけね……」

一言付け加えておいた。そうじや無いと、きっと理解できまい。

「霧人？うん。あんな感じ。つて、でもあいつ悪い奴じや無いよ？俺がこんなんだからしつかりしてるだけだと思つ。あ、そういう。霧人はお兄さんの所に行つてるよ？」

兄さんね。と言う事は保健室なのか。あ、今日はまだ恵様の顔を拝見してない。行かなきや！

「私、保健室に行くわ。恵様に会いに行かないと！」

こんな大切なこと忘れてしまつてるだなんて、愚か者だ！と思い、私は椅子を腰で後ろに引いた。

「今は無理だと思うよ？無意識界の時空間、開こうとしてるから。霧人達は任務遂行中だもん」

「え？」

二人でコソコソそんな事をやつているとは。

「じゃあ、杉浦くんは何故此処に居るのよ？仲間なんでしょう！加勢しなくて良いの？」

そうだ。三人で行つことが普通なのではないのか？

「俺は例外。仕方ないんだよね……危険な目に遭わせられないからだつて！面白くないな」つていつも思う！」

今度は、ブスツと膨れつ面。感情表現の豊かな奴だな。でも、これが杉浦の持ち味なのだろう。アイドル的存在になつてているのも判る気がした。

でも引っ掛かることがある。何だろう？危険な目に遭わせられな？まるで大事にしているつて事じや無いか。箱入り娘ならぬ箱入り息子……みたいな感じ？

でも、まさか杉浦がプリンス候補とは思えないでの、やはり私はこの有利得ない考えを却下した。でも、気にはなる。

「時空間はいつ元通りになるの？」

「昼食には元通り。霧人も、その内戻つてくるよ。それにしても、都築さんがプリンセス候補生だったなんてね？結構好みのタイプだつたりしてたんだけど、嬉しいな」へへ

その笑いはなんだね！こいつって本当に能天気だな。待てよ？プリンセス候補生で嬉しい？それって、プリンスになるべき人の言葉じゃ無いのか？

プリンセス候補。プリンセス候補。この両方ともが出会いうべく出会いそして結ばれる。それは聞いた事がある。って事は、やはり、杉浦が？有り得ない考えが再び私の頭の中でぐるぐると回り始める。

「杉浦くんは、嘘の付けないタイプだよね？そうでしょう？」

とにかく、話を自分に都合の良いように振る。そうしたら、この杉浦はもしかしたら口を割るかヒントをくれるかも知れない。そう思つた。

「うん。嘘は嫌いだ。コソコソするのも嫌いだよ」

だろうな。昨日あれだけ何かを言いたげにしていたのだ。そう言うところを突けばボロを出すに決まっている。正直者が馬鹿を見る。その良い例だ。今なら前園は居ない。なら、けじか瞬ける絶好のチャンス！私は、改めて杉浦の顔をじっくりと見た。地球で言うところの狸みたいな顔をしているなつてそう思つてしまつ。

にしても昨日は確かに頬に絆創膏を貼つていたはず。なのに、その位置に傷らしきものが無い。どう言つ事だ？これはファッショーンなのか？そう訝しげに見ていると、

「北山さんつて、俺より遙かに大人つて感じだよね？落ち着いてても、都築さんと仲が良いって事は、それだけ愛してるんだね？まるで、俺と霧人の関係みたいに」

そりや、主従関係なのですから。って事は、前園は杉浦の付き人？出来損ないのプリンセス候補生にくつづいているお供の者なのかも知れない？

ならば、判る気がした。私にとつては、恵様は神にも等しいから

敬愛しているけど、普通の付き人だったら？同じノウブル生まれ同士だったら？意見もハツキリ言えるだろう。信頼の仕方はそれぞれだ。

その事に気がついた私は、杉浦の鼻のてっぺんに有る絆創膏に素早く手を伸ばし有無を言わさず剥ぎ取った。すると、そこには赤い古代文字の紋章が光るように有つたのであった。

「貴方が、プリンス候補生……」

呆気に取られた。そして、ハツと気が付きその絆創膏を元通りに貼り直した。地球人はそれを見ていなかつたようだ。良かつた……「そ。俺がプリンス候補生。今有り得ないって顔に出てたよ？皆そう思うのも無理ないよな～俺馬鹿だもん」

にっこりと笑つた。まるで気付いて下さつて感じだつた。それが余りにも不自然だつたけど、もう、私は気付いてしまつたのである。

「俺は、道標ヒンケイを北山さんに授けたけど、教えてはいないよね？なら、問題なし。じゃあ、保健室に行こうか？これからが大変だよ？」

一杯食わされた氣がする。無意識界の時空間を開いてるつて一度言つたはずなのに、この変わりよう。けれど、怒る氣はしない。

私は、ゆっくりと立ち上がり、ホームルームの始まる予鈴のチャイムの中、保健室へと杉浦の後に続いたのであった。

#3 アカンシャスと地球

「よつ！霧人！」

「何しに来たんだ、お前は！危ないから来るなと言つていただろう！まだ、捜査段階だから……」

前園は、眉間に皺を寄せてキッと杉浦を睨み付けたが、私が杉浦の背後にいることに気が付き、息を吐いた。

「北山さんは、俺がプリンス候補生だつて気がついたんだ。俺、教えてないからな！」

念を押すように言つた。まるで説得に欠けるような念の押し方だな……とも思う。

「北山さん？気が付いたというのは本当ですね？厚史が言つたとかそう言つわけでは？」

沽券に係わるからそう問い合わせてきたのだろう。でも、言つた訳じや無いし、

「ええ、杉浦くんの言つた通りよ。自分で気が付いたの。絆創膏の下にちゃんとプリンス候補生の印が有つたしね」

前園は溜め息混じりに、

「だから、そんな物で隠すなと言つたんだ。きちんと消せば済むことだろ？に。案の定こんな事態にならうとは……北山さんには手伝つてもらわないといけませんね？こうなつた以上……今、無意識界の時空を開いてます。スパイズは厚史。君だ！鍵は君が持つているけれど、その鍵が何なのか？それが判明していない。危険だけど厚史にも一度来てもらう事になる……」

その言葉に、ワンパク坊主発揮の杉浦は、

「おっシャー！そつ来なくつちゃ！こんな所で一人燻つてるのって、俺嫌い！」

いつも簡潔に話は纏まつた。がしかし、前園の私を見る目は厳しく感じられた。ま、それも仕方ないか？主従関係がハツキリしてゐ

だけに、こういう状況下に私がいるのが気に入らないのだろう。だけど、私だって使命がある。アカンシャスと、恵様。この二つをきちんと正常な状態に戻さないといけない。

「では、開きます！」

前園兄は成り行きを見守りつつ一言やつ置いて、無意識界の時空を開けたのであった。

無意識界。そこはアカンシャス・ワールドの様な暗闇の世界。そしてあちらこちらに点滅している多数の星々。それは満天の夜空といった感じだった。

時々浮遊している雲みたいな薄っぺらい霧。それを、悪夢と言うらしい。私は初めてこの日で悪夢を見た。しかし、时空は縦横広がっていてどちらに進んで良いのか判らない。それを補佐するように、前園兄が言った。

「悪夢が密集している場所を捜す。それが、一番先決である」ま、悪夢が原因で、秩序が乱れたのなら、一番それが手つ取り早いであろう。そうだよなって思つて私は、三人の後を追う。まるで浮遊した靈魂のよう。そんな気分だ。空間が上なのか下なのかさえ忘れてしまいそう。

そんな時、私は流れ行く霧の末端に触れそうになつた。それを防ぐために前園が、腕を引っ張り上げた。

「馬鹿！これには触れるな！悪夢に取り込まれるぞ！」

乱暴なくらいキツク握り締められたその手は私の腕に幽かに震えているように伝わった。

「な、何よ！馬鹿だ何て！そんな言い方は無いんじやない？」

でも、前園はその腕を引っつかんで着いて来いつて表情で私を見ていた。私は、何も言えなかつた。それだけ前園の表情は険しかつた。

「何さ……女生徒には優しいんじやなかつたの？」

ボソリと呟く。初めて言葉を交わした時から心がチクチクする。

この感情が良く判らないけど、私はこの前園が苦手なんだろ? つてそう思つことにした。そんな時、

「霧人は、仕事の関係で悪夢と係わったお父さんを亡くしてゐるんだ。だから、キツイ事言つてしまふんだよ。別に北山さんの事が嫌いとかそう言つんじゃないから」

杉浦が私の耳元でそう囁いて、すゝつと前園の横に並んだ。

前園は、私の腕を掴んだまま黙つていた。会話が聽こえている様ではなかつた。

何さ、杉浦くらいいもつと素直になつたら? 可愛げのない奴! とか思つてしまつたけど、私も黙つて前園の掌の温かさを感じたままこの無意識界のどんどん奥へと進んでいた。チクリチクリと心に何かが棘を刺す。

それから、どれくらいの時間浮遊していたのだろうか? 私達は最終地點? では無かる? と思われる場所まで到着したのである。

「IJの辺りは、密集してるけど? IJから良いんじゃ無い?」

杉浦が珍しく、自分からそんな事を口走つた。霧が濃く、もう行く手を阻んでいる。でも、此処で良いのであろうか?

「そうだな。もひこれ以上進むことが出来ないな。後は、厚史。お前の出番だ……」

前園は、そつと私の腕から手を退けた。私はチクリとまた胸が痛んだ。

「合点承知のすけ~って言つたいところだけど……何をすれば良いの?」

素でそんな事をかましてくれる。いや、これは、始めから判つている事だ。私が突つ込むコトでは無い。だつて、私にすら何をすれば良いのか判らないのだから。

「厚史? ジツくり考えてみる? お前が鍵を握つてることだけは確かなんだ。でも、それが何かは僕には判らない。時間はまだまだ有るのでから

前園は、真剣な表情でそう問いかけた。

「アカンシャスって、何故地球と繋がってるのかな？俺今までずっと不思議だつたんだ」

突然何を言い始めるのだろうか？私を始め前園兄弟は目を瞬かせた。

「だつて、悪夢は、地球のも含めて俺達が食べてる訳だろ？俺達つて何？地球人の付録？それとも、地球人が俺達の付録？そうやつて考えると、俺達の存在意義が良く判らないんだ」

大真面目な話を始めてしまった。チンパンカンパンな事ばかり話してきた杉浦らしくないまともな発言。それに関しては、私も考えてきた。

一体何者なのか？

特に私の場合、悪夢も食べれない異端児である。そう言つ子供で、親に捨てられた。その返答が、今この場所にいる前園兄によつて紐解かれた。

「わたくし達は、地球人にとっての獣獣である。夢喰らいと称されている物。そう、無くてはならない秩序。そして、夢を喰らい、生き長らえる事が出来る唯一の生物。人の形をしているのは、只の飾りに過ぎない。でも、アカンシャス・ワールドは必要不可欠な物である。よつて、わたくし達は必要である」

まるで機械みたいな口調で話していた。きっと、これが眞実なのである。でも、何故、私みたいな子供が生まれたのか？

そう考えて、私はすかさず問い合わせる。

「では、訊きます。悪夢を補給できない子供が生まれるのは何故？私もその一人よ！」

私はどうしても知りたかった。悪夢を食べれない者が何故アカンシャス・ワールドで生まれるのである。

「それは、軌道修正。悪夢を食べることだけが、わたくし達の使命

であると言つ事を覆す為に神が与えた試練。そして、今この状況下を開けることによつて、アカンシャス・ワールドは再生します

前園兄は、まるで全てを知つてゐるかの様にそう答えた。

「それつて、悪夢補給無しで生きていくことができる世界を造ると言つ事？そんなの、アカンシャス・ワールドである意味無いじゃない！……でも、そんな事どうして言い切れるの？神がそう言つたと？」

私は、激しそうな感情を抑えつつ前園兄に突つかかつた。それを、前園が制する。

「僕達の仕事だ。これ以上は、訊く権利は無い」

なによそれ！そんな納得出来ない説明で引けと？これつて、アカンシャスを揺るがす大ニュースだ！しかし、私は心の中で苦虫を潰すしかなかつた。前園の顔が厳しいものに摩り替わつたからだ。

「何はともあれ、後は、厚史に行動に起こして貰わないといけない。それが、この^{プロジェクト}計画の重要なところだ」

前園は、切れ長の瞳を杉浦に向けた。何様のつもり？難題過ぎるのに、杉浦に全て任せたんて……私はイライラしながら杉浦の行動を見守つた。

「北山さん。悪夢、自分で補給出来ないんだね？あの……俺、思つんだ。これはもしかしたら試練なのかも知れないって。それは、全て仕組まれて、俺と北山さんが偶然此處に居るつて事も何があると思う。で、考えたんだ。俺と一緒に来てくれる？保証は無いけど、試してみる価値はあると思うんだ」

杉浦は真面目な顔をしてそう言つた後に、茶目っ氣タップリな表情でっこりと微笑んだ。そして、鼻筋に有る絆創膏を右指で摘むと剥ぎ取つたのである。

すると、その赤い紋章から辺りの闇を蹴散らすかのような光を拡散し、そして、霧の中に吸い込まれた。

「これは賭けなんだけど、俺と一緒に悪夢の中に付いて来てくれる？もしかしたら、何とかなるかも知れないよ？」

大きな瞳が瞼に包まれ、そして、私に手を差し伸べた。その表情が、恵様と被つた。こうゆう風に笑う恵様。

「厚史、本気なのか！馬鹿な事は言つものじゃ無いー・北山さんまで巻き込む事は……」

前園が、反論しようとしたが、私は、それを遮つた。

「良いわ。その賭け乗つたわ！」

何故こんな気持ちになつたのか？自分でも判らない。杉浦の言葉に惹かれたとかそう言う類でも勿論ない。でも、何かしら感じるのである。額の星型の黒子の辺りが熱く感じ始めている。私に何かすることがあるのかも知れない？と、何かが背中を押す。

「北山さん！本気か？考え直せ！君は関係ないんだ！それに、悪夢補給が出来ない体では絶対に無理がある！」

前園は頑として否定してゐようだった。でも、私はあの霧の向こうに行かなきやならない気がする。何故？

「良いんだね？俺は行くよ？」

杉浦が私の右手を掴んだ。

私はその手をきつく握り返した。

「もう、後戻りはしたくないから。真実をこの目で！」

そう言つた私の言葉で、杉浦は霧状の悪夢の中に飛び込んだ。私はその手を握り締め、少し遅れて飛び込んだのである。

遠くで、前園の声がぐぐもつた形で木霊した気がした。でも私は真つ直ぐ前を見て、この目で真実を見定めようと目を凝らしたのであつた。

何層にも重なった悪夢の中。そこは私が思い描くことの無かつた世界が広がっていた。

黒々と、そして怪しい世界が広がっていた。人の悪夢。それは、様々あり過ぎて頭が壊れてしまいそうだった。

「悪夢。今まではどうやって補給してたの？都築さんから？」

余りにも気持ちの悪い世界に、戸惑い、吐き気がするその状態を察知したのか？杉浦は気を紛らわせるためか、問いかけてきた。

「ええ。そうよ……悪夢のエナジーだけを補給してきた。味つて物を本当は判らないの。でも、恵様は、味があるってそう言つていました」

そう、悪夢の内容。そして、恵様がおっしゃる『味』というものが判つてはいなかつた。今までその事に関しては感想も言えずにいた。でも、此処に来て感じたのは、どす黒い、腐つた空氣だ。

「人はね、悲しみ、怒り、憎しみなどのマイナス面を心のどこからに持つているんだ。でも、それをひた隠し生きている。そして、そのイメージを持つて夢の中で生産する。無意識界は、自分でも判つてない事が多いいんだよ。水面下で行われていることなど、判らないのと一緒にだ。でも、俺達アカンシャスの者は、それを食べてそして明るい無意識界を取り戻す。それが本来の使命なんだ」

饒舌に杉浦は話出した。いつもの阿呆面が嘘のようだ。

「そう。でも、私には出来ない。何故？」

「それは、さつき霧人の兄さんが言つてた通りなんだよ。世界を変えようとしている神の悪戯。その結果、アカンシャスは人口が減つた。もしかしたら、人間に、俺達に、警告を発しているかも知れない。人の心の奥底。無意識への関心を勧めるために！」

今、何処からか若い女性の悲鳴が聴こえた。

「今の、何？」

「色んな夢がある。きっと、何かに追い掛けられる夢でも見てるのかも知れないね？」

私はガンガンと鳴らす甲高い警報で頭が割れそうな気分になつた。悲鳴、嗚咽、怒鳴り声。様々な声が脳に届く。見ている映像も残酷すぎて、田が当たられない。

「恵様は、こんな夢を補給しているの？それを毎回私に……お疲れになるはずだわ？ そうよね？ 違う？」

今まで悪夢を私の為と、自分の為に補給してきた。それを思うと、心がはちきれそうだ。

あ、だから杉浦はある時、恵様を見て『疲れてるんだね？』と言つたのか？ 何も感じられなかつた自分を、もの凄く恥じた。

「本当に、都築さんの事が好きなんだね？ 主従関係も色々だけど、北山さんは一味違う。自分を追い詰めることはないよ？ 都築さんも、君にちゃんと大切な物を貢つてるはずだからね？」

何を？ 私は何もして差し上げてない。私は只のお荷物だ。そう思うと、目から水が流れ落ちた。これは何？ 私、泣いているの？ 悲しいの？ 悔しいの？

母に捨てられても泣いたことなど無い。でも、今私は涙が零れてそれが止まらない。

「人はね？ 信じられる事が大切な。でも、それは依存で終わつてしまつてはいけないと俺は思うんだ。笑つて生きなきや！」

杉浦の言葉が胸に届く。こいつがいつも笑つていられるのは、それが大切だからと知つていてからなんだと判つた。

「俺ね？ 都築さんを、教室で時々眺めてたんだ。心の豊かな子だなつて。そして、プリンセス候補生だと知つたのは、廊下ですれ違つた時、掌の紋章が見えたから。都築さんは、始めから知つてたはずだよ。俺がプリンス候補生だつて。だつて俺の場合、顔に移動する紋章を絆創膏で隠してるだけだったからね」

そして一息入れる、言葉を紡いだ。

「でも、彼女は近づかないようにしてた。常識のある子で、とても

好印象だった。同じ高校の同じクラス。まさか、あの場所で出会うなんて思つても無かつたけどね？」

杉浦の話を聴いていると、周りの雑音や映像が吹き飛ぶ。これが、次世代を担つていくプリンス候補生の力？馬鹿なだけじゃなかつたんだ。学問への執着心は無くとも、きちんと大切な学ぶべき事を学んで、育つてゐるのだと理解した。私は、杉浦を見直した。きっと素晴らしいプリンス、そして、頂点に立つ王になるであらうと確信した。

「さて、この先が最終ラウンドだね？ここから先は、死を覚悟しないといけないかも？」

杉浦は、ギュッと力強く私の手を握り締めた。私はハツと前を向いた。目の前に立ち塞がる大きな黒ずんだ扉が有る。そして、その前で、停止した。

「これが無事終わつたら、都築さんに伝えるよ。俺の本当の気持ち。だから生きて帰らなきゃな？」

「どうせなら、お田覚めのキスでもして差し上げたら？眠り姫のようだ」

私は付け加えた。そして、クスリと私は微笑んだ。杉浦なら、大丈夫。恵様とお似合いだ。そして、心から賛成できる。

恵様？貴女は大変価値のある物を得られますね？そう心で唱えることが出来たのである。

それから、目の前の重い扉をこじ開けようと私と杉浦は力を合わせて押した。しかし、ビクともしなかつた。

「何だ？この扉は？開かない……」

杉浦は、浮遊している体なのに、その場で胡坐をかけて、髪の毛を搔き亂つて考えていた。私もこの先に何かが隠されていると思つてゐる。なのに此處で足を止められて、イラついた。

「何かが足りないのか？それとも多いのか？それが何なのか、俺には判らないよ……」

杉浦の気持ちが判らないわけでは無いけど、此処で頑張って欲しいものだ。ちょっと他力本願。でも私に関係するものは何がある？そんな事を考えながら暑さを感じ、汗ばんできたような気がする自らの額を拭った。

すると、一筋の光が扉の一点に当たった。

「え？」

何やら、鍵穴のような物がそこに有つた。

「杉浦くん……あれ……！」

私は素早くそれを指差した。

「何？」

小首を傾げて杉浦はそれを見た。光は消えてしまい、鍵穴は消えてしまった。

「鍵穴じゃないかな？さつき幽かに見えたのよ……」

私は、直ぐに消え去った光が何だったのか

？をもう一度考えて、さつきみたいに、額に手を持つていった。星型の黒子のある額。これが何か関係有るの？そう疑問に思った。そして、前髪を搔きあげてさつきの光を望んだ。

すると、光が再び一直線に放たれた。私はしつかり額の下にある黒子を露にしたまま前髪を押し上げていた。

「ほら、あれよ！」

と、杉浦に指示した。すると、杉浦にもその鍵穴が見えたらしい。早速その鍵穴に近づいて行つた。勿論私も後を追つた。

その鍵穴は、私の背丈よりも少し高い位置に在つた。そして、杉浦は、私より背が低いので、背伸びをして目を凝らしていた。

そして、その鍵穴の下に何か文章が書かれてあることに気が付く。「何で書いてあるのか、私には読めないわ！何が書かれているのかしら？」

そう、その文字は古代文字で、紋章と同じ様な文字であった。

「うへん。俺には見えないんだけど……」

その見えないというのは、背が足らないから？それとも読めない

「どう意味？」

「悪いんだけど、北山さん、肩車してくれる？」

おいおい。仕方ないな～って思いはしたが、もしかしたら、杉浦には解読出来るのかも知れない。そう思つと、私は、浮遊している。その場で杉浦に肩車をしてあげた。思ったより軽かつた。それは、重力が無いからかもしれない。

「判つたよ。北山さん！ そのままで居てね？ ビリヤー、鍵は俺の紋章が関係してるみたいだ！」

頭の上で理解した内容を遂行すべく、杉浦は肩の上に足を乗せて立ち上がった。すると、一度鍵穴の部分に、紋章の光が走った。

『ギ~~~~~シ』と重くてビリしそうも無かつた扉が開く。

「杉浦くん！ 開いたわ！」

私は嬉々としてそう言つた。杉浦は、すぐさま私の肩から飛び降りた。

「鍵は、俺の紋章だつたんだね。でも、この先何が有るか判らない、氣をつけような？」

にっこり笑つて、でも、心配りしてくれるのがありがたい。そして、私も役に立つたと思うと嬉しく感じられた。

私と杉浦は、その先に進んだ。中は光に満ち溢れた、花々が辺りに咲き乱れ、小川のせせらぎが聴こえる。まるで、思い描いたような天国かと思える景色がある不思議な世界だった。

頭に神々しい輪っかを乗せた天使たちが戯れ、妖精が花の蜜を集めたり。周りはタンポポの綿毛のような白い景色のように明るく、そして賑わつた世界だった。今までの悪夢でどす黒かつた空間はそこには無かつたのである。

「心地が良い……のは良いのだけど、ここが、悪夢の果てなのかしら？」

大変危険な地帯が待つてているかと思っていたのに、ちょっと、拍子抜けした気分。

そんな事を思つていると、一人の天使が私と杉浦のもとにやつて

来た。

「ようこそ。この地でお待ちしておりましたよ。お一方」
待つっていた？何故？

「アカンシャス・ワールド再生の為ですよ？その為にあなた方もいらっしゃしたのでしょうか？」

何も問い合わせないのに、勝手に答えを導き出してくれる。それが不思議だった。そして、理解した。あ、そうか。神が起こした悪戯。それの答えが此処にあると言う事なんだな。

「この地は聖地です。悪夢の影に隠れて、良い夢が見られますように。という気持ちが籠った場所。そして、此処に辿り着いたあなた方には、一つの夢をお渡しできる。言つたなれば、願いの場所でもあります」

「願いの場所？」

杉浦と私はお互に一緒に口走った。

「ええ。それが此処に来た者達の、特権。そして、神の意思」

そう言われて、私は勿論考えた事は、アカンシャスと、恵様の事。杉浦に目配せすると、杉浦も、解かってると言つた表情で頷いた。
「では、お願いがあります。アカンシャスの存続を。全てが在るがまま……元の姿に戻る事を願います」

私は、そう言つた。杉浦もそれで良いと笑つた。

すると、何処からか高らかなホルンの音が鳴り響いた。私は吃驚してその音の鳴る方を見た。そこには、大きな大理石で出来た銅像の大男がホルンを鳴らしていたのである。

そして、ホルンの先から、古代文字の形をした物がフワフワと音と共に広がつた。

「これで、願いを聞き届けました。貴方達は元の世界に戻りなさい。此処は、死の世界もあるのです。生きている者の居るべき場所ではありません。さあ、あの大樹の元に行つて、その下にある穴から出るのです」

天使は透き通るような声で優しくそう言つた。私達は、天使が指

差した大樹に向かつて歩いた。そして、穴の中に身を投じたのであつた。

穴の中は、滑り台のようになっていた。

私と杉浦は、勢い良くそれに飛び込んだ。結構長い間滑っていた気がする。でも、私は満足していた。これで、アカンシャスも、恵様も元の通りになる。そう思つて意氣揚々としていた。

そして、元の場所。前園兄弟の居る場所へと戻つたのであった。

「ただいま～～～！」

空間が狭れ、私と杉浦は丸い穴を開けて戻つてきた。それを驚いた表情で前園兄弟は、見ていた。

「任務遂行終了！ これで、アカンシャスは元通りだ！」

杉浦は嬉しそうに微笑んでから、前園にガツッポーズして飛びついていた。前園は、「それは良かつた。でも、確認しに戻らないといけないだろう？ 此処では判断できないからな」

実感が湧いてない様子であった。それもそうだ。ここにずっと居たのだから。あの場所で私達にあつたことなど判るはずも無いのだから。

「どのくらい時間掛かつた？ 僕達、時間の感覚が無かつたから……暇だつたか？」

杉浦は、帰りの道中、横に並んで前園に問いかけていた。私は、最後尾でそのやり取りを聞いていた。霧のある場所を避けながら。「此処での時間は、あやふやだからどうだろ？ でも、かなり時間は経つているだろと思われる」

前園は、それを気にしてないよつと言つた。

「それより、北山さん？ 体の調子が悪いとか、変だとか、そつ言つ事は無い？」

突然、話を振ってきた。それも、私の顔を見ることもしないで。だから私は、問い合わせられたことに始め気が付かなかつた。

「北山さんつてば～！」

と、杉浦が振り返つて私の腕に手を回してきて始めて気が付いたのである。

「体調大丈夫かって？霧人が訊いてるんだけど？大丈夫？」

ちょっと心配そうに杉浦は問いかけた。

「え？あ、うん。平気だけど……」

私は、どうも前園のことに関しては上手く言葉が紡げないでいるみたいだ。

「霧人～心配だつたら、ちゃんと顔見て問い合わせるよ～！」

「え？」

そう言えば、違和感があつたのは、前園は、私があの場所から戻つてから一度も目を合わせて話してないからだと気が付いた。別に、私の顔を見たくないのなら良いのだけど？でも、また、チクリチクリと、胸が痛い。何なのよ。この痛みは？考えようとしたけど、その前に前園が、

「それなら良いんだけど……」

興味が有るのか？無いのか？判らないように言葉を濁していく。私はちょっとムッとした。何なのさ！ハツキリしてよね！つて、なぜ怒らなきやならない？また、自分の感情が良く判らない。でも、腹が立つたから仕方ない。それがどうしてなのか？それを考えるところなく、私は訥然としない思いを抱えていた。

帰りは、すんなりと行つた。霧はまばらで、行く手を阻むことは殆ど無かつた。先に大変だつたからそう思えるのかもしれないが……でも、あとは、無意識時空を地球に繋げるだけ。でもその事に時間が掛かつた。

「なあ、ポイントは此処だつたんだろ？何故直ぐ帰れないの～？」

杉浦は、全く判らん！と言いたげに、前園兄弟がやつていてる行為を見ながら、空間に胡坐をかけてブツブツ言いながら浮遊していた。それもそうだよな？恵様に会いたいだらうし？私は隠れてクスクス

笑っていた。

「時間軸が今までと違うからだ。少しは落ち着いて黙つてろー！」

本当にこいつらの主従関係って変だ。前園も苛立つているようだけど、それをそのまま感情に出さなくとも良いだろうに？私はそう言つ「一人を見てまた可笑しなった。

にしても、どれだけ時間が経っているのであろうか？この分だと、一日は過ぎてるだろうな？って感覚だった。私が恵様から悪夢補給せずに一日位か……でも、思ったより頭の中はスッキリしている。だけど、そんな平和ボケをしている次の瞬間、私の脳に激痛が走つたのである。

「痛い！」

熱く額に突き刺すような激痛を感じた。体を九の字に曲げてこめかみに手を当て私はこの感覚に対応しようとした。誰か！

その様子に、

「北山さん！」

と、暢気に構えていた杉浦が私に気が付きあたふたとやつて来た。けれど、それに気を掛けることが出来ない程、私は余裕が無く、ガングンと響く頭の中に気が集中していた。

「まさか、もう一週間が経つてるなんて事は！」

前園が私のところにやつて來たみたいだつた。でも、

「い、痛い～！」

私はそんな事を知ることなく蹲つて頭を抱えていた。こんなに響く頭痛は、あの時、母に捨てられた時以来だ。その内、意識がままたなくなつて、脱力感が出るだろう。でも、どうしようもない。ここにいる者達がどうひつ出来るものではないのだから。私このまま死ぬのかな？

そして、私は意識が遠退くのが判つた。そして氣を失つた。

夢の中、耳元で聴いた事がある音楽が流れている気がした。それは、あの天国のような場所のホルンの音色。音色がとても澄んでいて気持ちが良い。そして、私は目を醒ましたのである。

「気が付いたかい？」

前園が、至近距離で私を見下ろしていた。よく見ると、私を抱きかかえていた。

「お……重いわよ。私！下ろして！」

思わず動搖して、私は前園から離れようとした。しかし、前園はその言葉を無視してしつかり抱え上げると、私を何処かに運ぼうとしていた。

「気分はどう？」

「え？ あ、うん。平氣みたい……」

そう言えば頭の疼きが無い。一体どうして？

「悪夢取り込んで置いて良かつたよ。厚史は、いつ言つ事には慣れて無いしね？」

どう言う事？ ジャア、あの頭痛は、悪夢補給が出来てなかつた為に起つた事なの？ そして、前園がその受け渡しをしてくれたってこと？ 私は顔から火が出る勢いでカツとなつた。でも、そんな様子に気が付かないのか、

「時空間の暇な時間で、睡眠とつておいたんだ。もしもの事があると困るしね？ でも、厚史から聴いた話だと、何かがおかしい気がするんだけど。北山さんは、全てが元の通りに戻るようになつて願つたんだよね？ それなら、こいつは悪夢が取り込めないアカンシャス人がそのままいることは変だと思うんだけど。どうしてなのだろうか……？」

そんな事判る訳ないでしょ！ ちよつとそれより下ろして欲しいんですけど！ 間近で前園の整つた顔を見るのが凄く不自然だったし、恥ずかしかつたから。何故、恥ずかしいの？ 私……その答えは未だ出なかつた。

「それより此処は……」

どう考へても、あの時空間ではないのは、見て明らかだつた。明るい世界。

「ん？此処は地球だよ。もう、時空間は開いて、元の世界に戻った所」

前園はフツと笑つた。

「都築さんに会いに行く？もう、目が醒める頃だと思つよ？厚史はさつさと行つちゃつたけどね？」

今度はクスクス笑つてゐる。あ、前園も判つてるんだなと思つた。杉浦が、恵様の事を想つてゐる事に……私は直ぐに判つた。

「私も恵様にお会いしたいわ……」

お顔を見たい。そう。改めてお話もしたいとも思つた。

「良いよ。じゃあ、行こう」

前園は、私をそのまま抱えてベッドへと向かつた。数歩の所で前園は、ベッドのカーテンを開いた。そこには、恵様が微笑んでいらしたのが目の端に映りこんだ。私は依然として前園の腕の中で抱えられていた。

「絵夢！」

恵様は私に気が付き、笑顔で名前を呼んで下さった。それで私はホッとした。ちゃんと生きてらつしやる。

「あら、前園さんどー一緒にだつたの？絵夢も隅に置けないわね？」
茶化してらつしやるのか？恵様はコロコロと笑つた。

「無意識界の時空間で一週間くらい、悪夢補給が出来なかつたから、霧人が都築さんに代わつて分け与えたんだよ。でね、霧人の態度凄かつたんだーあんな顔見るの、どれだけ振りだらう？ね、霧人？」
杉浦まで、二タニタ笑つて私と前園を交互に見た。何よーその笑いは！私は杉浦にキツと視線を送つた。しかし、杉浦は逆に笑つてウインクをした。一体何のつもりなのだろうか？

「前園くん。もう大丈夫だから、下ろしてくれる？」
私は、もう大丈夫。恵様の顔も見ることが出来たし。そう思つて言つた。

「あ、うん……」

前園は、少し躊躇いがちにそう言って私を下ろしてくれた。それ

を見て、恵様は変な顔をされた。杉浦にいたつては小首を傾げている。何なんだ？この反応は……私には理解できなかつたけれど、とにかく、恵様の手を握り締めるために近寄つた。

「『ご無事で何よりです。恵様！』

私は、横になつてらつしやる恵様の手を取りそつ言つた。ああ、恵様の体温がここにけやんとある。

「絵夢も、『ご苦労様！』それにしても、皆で時空間旅行か～良いな。あたしも行きたかったな～」

「何を馬鹿なことをおつしやるのですか！そんな危険なことは許されませんよ！私だから許される事ですから。それでは、お父上とお母上に『ご連絡しておきますね？きっとホッと安堵なされますから』

私は、事の次第を全てありのままを文章として報告した。それをするのが私の使命。それにこれは、嬉しい知らせでもあるのだ。すると、こんな返事が返つてきた。

『『ご苦労。全てアカンシャス・ワールドは元の通りになつた。悪夢を受け入れることが出来なかつた者達も、この世界できちんと悪夢を自らの手で補給し生活できるようになり、我々は安堵している。全ては、絵夢の働きにある。ありがとう。では、恵と共に帰還する時を楽しみにしていろ』』

「ひつひつ内容だつた。

「ちょっと待つて？これはどじつ言つ事なの？」

悪夢を食べれない者達が、悪夢を由ら補給出来るようにになつたと言うのは……」

私は、一回読んで始め氣付かなかつたからこの状況を良かつたとは思つた。しかし、二度読み返しあることに気が付いた、自分は悪夢を補給できていない。なら、私は何？

「絵夢？それはね……あなたは地球人と、アカンシャス・ワールドを繋ぐハーフだからなのよ……」

恵様は笑うことなく、滅多に見せない真剣な表情でそうおっしゃった。それは、どういう意味なのですか？私が、地球人と、アカンシャスのハーフ？そんな事有るはず無いじゃないですか？

思わず動転して、私はよろめき近くのパイプ椅子の脚で躊躇しきりになつた。

「信じられないのも判るわ。でも、それは眞実。目を背けることが出来ないことなの。今までひた隠しにしていたことなのだけど、あたしがあの時、絵夢を拾つてからずっと内密に調べてたの。あなたのお母様にもお会いしたわ。そして、眞実を知つた。貴女は間違いない、地球人と、アカンシャス人との間に生まれた子供なの」お母さんに会つた？恵様が？いつ？そんな事今まで知らなかつたし、気付かなかつた。

「何故隠しておられたのですか？おっしゃつて下されば、私だつて……」

私だつて、何？その後の言葉は紡げなかつた。

私は、恵様がいなければ、今ここにいることをえ出来なかつたはずだ。それなのに何を言おうとしていたのだろう？……そう、気持ちが沈んだ。

「お母さんは、アカンシャス生まれのはず。なら、お父さんは？妹が居たのにお父さんが違つたの？私は不義の子供だったの？そんなの……」

「そうなのだ。私はお父さんの子供じや無い

！つて事になる。それでも、お父さんは何も言わなかつた。どうして？確かに、父の私への干渉は少なかつた。

でもいくらなんでも、そんな事は……二イーディー生まれだからといつても、許されない事だつて有る。それでも、お父さんは何も私に言わなかつたし、お母さんも何も言わなかつた。そんなの変じやない！仮面家族だつたの？私達の家族は！

たつた三年。その内一年は記憶に無い。赤ん坊過ぎたから。でも、その後の一年は、ちゃんと今でも覚えている。お母さんの笑顔。私

は忘れた事なんてない！捨てられても、私は本当に恨んでなんかいなかつたのに！

今は、恨みが籠つてしまつ。何故、私を生んだの！今この場でその真実を明かして欲しい氣分だつた。

「恵様は、全てをお知りになつていらっしゃるとおっしゃいましたね？私の母から真実をお聞きになつたと」

私は、知らなきやならないのだと自分で思つた。私は、一体何なのか？

「絵夢のお母さんは、ノウブル生まれのプリンセス候補生だつたの。でも、この地球で恋をして、その方と結婚してしまつた。そして、絵夢、貴女が生まれた。勿論、反対したそうだわ、家族の者達は……それもそうよね？仮にもプリンセス候補生。でも、貴女のお母さんは、駆け落ち状態で逃げ回つた。しかし、不慮の事故で愛した人を失つた。絶望したお母さんは、もうどうしようもなくなつてアカンシャスに帰つた。ノウブルという肩書きをも捨てた。そして、今 の旦那さんと住むことになつた」

私は真実だとこゝそその話を、呆然と聞いていた。お母さんが、ノウブル生まれのプリンセス候補生だつた……そして、駆け落ち状態で、この地球で愛した人と結ばれ、私は生まれた。それを聞いて、動搖を隠せるはずが無かつた。

「それが真実……でも、他にも悪夢を自分で補給できない子達が居たわ！それはどう言つう事？変じやない！」

私は敬語も忘れてしまつてゐるほどに興奮してしまつてゐた。それほどにもう、何を信じれば良いのか判らなかつたみたいだつた。

「それは、神の悪戯。北山さん達親子の事が明るみになるのを避けたかったから」

杉浦が言った。

「じゃあ、ノウブル生まれの母だつたら、高い薬買わなくても、私に補給できたはずじや……？」

「それは、肩書きを捨てた＝剥奪。と同じことだつたからよ。そし

て、絵夢のお母さんの兄妹親戚とも縁が切れてしまっていた。でも、教えて貰つたの。あなたの従兄弟が……この前園霧人さんであることを……」

「恵様は、一瞬間を空けてそうおっしゃった。

「前園くんが……私の従兄弟……？」

つまり、血のつながりがあると言う事である。

私は従兄弟がいるなんて考へてもいなかつた。それじゃ、前園を見るたびにチクリチクリと胸が痛んだのはそのせいだったの?どこかで繋がつていたから、そう感じたとでも言うの?

頭が余計混乱した。余りにも沢山の信じることの出来ない真実を聞いたために私はパンク寸前だつた。

「北山さん?さつき、僕はこう問い合わせたよね?『北山さんは、全てが元の通りに戻るようになつて願つたんだよね?それなら、こういう悪夢が取り込めないアカンシャス人がそのままであることは変だと思うんだけど。どうしてなのだろうか……?』つて。一応、考える時間をあげたつもりだつたんだけどな?」
「判りづらかったかな?」

前園は、ちょっととハニカミながらそう問い合わせた。と言つ事は、前園は全てを承知で私を気に掛けっていた訳だ。

私は、その場に膝を着いた。立つてることが出来ないほど、へ口へ口だつた。知らなかつたのは、私だけだつたのか……

「て、ことは……恵様が、アカンシャス・ワールドに戻らないって言つたのは、もしかして……?」

私は、床にへたり込んだまま恵様を見上げた。すると、恵様は、「ちよつとした悪戯よ?笑えるものじゃなくて申し訳無かつたんだけど、一度真似して言つてみたかったの~」

「ああ、もう降参。私の負けだわ。」

「でもね、絵夢のお母さんから、手紙を預かってるわ。帰つたら読んで御覧なさい。あたしは封を開けてないから、安心して?それからあたし、絵夢のお母さんを尊敬してるの。多分、アカンシャスの

誰もが尊敬してゐると思う。確かに、母として絵夢を捨ててしまった事は、取り返しのつかない罪かもしれない。でも、人として、時空を超えた愛を貫いた勇氣があつた事を誇りに思つてゐるよ?それは判つてあげてね?」

そう言つと、ふと恵様は保健室の壁に貼つてあるカレンダーを見た。

「明日、終業式ね? アカンシャスに戻るのね? あたし達……」

短かつた一年がもう過ぎ去ろうとしていた。そして、この恵様と杉浦のそれぞの候補生としての修行の時間も終わろうとしていたのである。窓の外では、チラチラと綺麗なピンク色の季節には早い、桜と言ひう花びらが舞つていた。

「お～よく戻ってきたな！恵よ～大きくなつて！」

おいおい。身長は変わつてませんで、お父上様……立派になつての間違いでは？

あの日以来、私は恵様に対してもうと悪戯心が芽生えてきたみたいだ。何だか、お笑いの上での突つ込み役？みたいなものである。こう言うのも悪くない気分だ。

そして、私に宛てた、母からの手紙という物を読んだ。

「これがそうよ？」

帰つた早々、恵様から手渡された。

私は、ペーパーナイフで、真つ白な封書の先にナイフを入れる。それにはこんな事が書かれていた。

『^{あい}愛へ

これを読んでいると云つ事は、全て恵さんから事の次第を聴いた後だと思 います。私は、貴女を捨てた、悪い母親。それなのに、こんな手紙を残してしまつなんて、情けないことだと思うわ。でも、どうしても、私の言葉で伝えておきたかったことがあるの。それは、私が、愛した貴女のお父さんの事。本当に心から愛していたわ。優しくて、気品があつて、そして、ちょっと粗忽者だったけど。（お墓は、この場所にあります。もし地球に行くことが有るならば、行つてみて下さい。その方が、貴女の本当のお父さんの眠つている場所です）亡くなつて、私一人で貴女を育てれば良かったとも思った。でも、私には経済力というものが無かつた。そう、だか ら、アカンシャスに戻つた。階級を剥奪され、それでも、次に出逢つた方 と結ばれた。私はいつでも本気に入を愛しているわ。それは本当。貴女には、こんな苦労はさせたくは無いけれど、でも、愛の本当の意味は忘れないと欲しいの。こんな馬

鹿な女に言われたく無いかも知れないけれど、人を大切に、そして、愛せる子になつて欲しい。だから、私は、貴女に、愛という名前を付けた。今は、もう違う名前を名乗つてることでしょう。でも、忘れないで欲しい、こんな私が居たことを……

(追伸) 私を捜すことだけは決してしないで下さいね。私は、このアカン シャスの何処かで、貴女の幸福を祈っています。

最後の方は、涙で幽かに濡れた跡で、文字が滲んでいた。それでも、私には解読できた。

「お母さん……」

私は心の底からこの時、母の事を想い、泣くことが出来た。愛されていたのは本当だつたのだと。

それからと言つもの、忙しい毎日を送つている。それは、恵様がアカンシャスでプリンセスとしてのまた一段階上の修行が始まったからだつた。

今は、各ノウブルの方々を交えた交流会が主。その際、いつも恵様は杉浦の姿を追い掛けとはいつものように朗らかに笑つていらつしゃる。

もう、この一人の仲は揺るぎの無いもののように、沢山のノウブルの者達の間で噂になつてゐる。

杉浦はといふと、今になつて貴祿あるくらい背が伸びていた。あの頃は私よりもちびつ子だつたくせに一時々私は、「いつ結婚するの?」

何て意地の悪い事を問いかけてしまつ。それなのに、杉浦つてば、

「うん。恵ちゃんが、結婚できる歳になつたらね?」
つて、恵ちゃん呼ばわりで……もう、殆ど新婚カップル誕生のようだ。だから私は、こう言ってみる。

「貴方が、ちゃんとしたプリンスになつたら。の間違ひじゃなくて

?」

すると杉浦は、大笑いしてこう言った。

「俺は、直ぐにでもプリンスになるよ！その目で見ててくれよな！俺、嘘つきは嫌いだから、ちゃんと有言実行してやるさ！」ふんぞり返つてそう言った。

「所で、北山さんは？霧人とはどうなの？」

「ああ、また出たよ……」の台詞。

「こここのところ、杉浦はやけに前園の事をほのめかしてくる。従兄弟同士でも、この世界ではなんら問題は無い。けど、どうなのだろう？まだ私の心は傾く気配は無い。でも、杉浦の質問に否定の言葉も出ない。実際自分でどうありたいのか？が判つてないのだと思う。杉浦の側近のはずなのに、前園の姿が無いのも、ちょっとは気になつていたりするけれど、だからと言つて、何故？何で訊けないし……」

「あ、霧人なら、地球にいるよ？」

「あ、また心を読むような事をして……実際何を考えているかなんて判るはずも無いのは判つてているけれど、杉浦は、勘が鋭いから判つてしまつらしい。」

「お兄さんの手伝いだよ。霧人は秘密特別捜査隊志望だから。あつちも大変みたいだな」手伝いに行つたら？」

「う……そんなこと出来る訳無いだろう！ムツ」としていると、「じゃ、俺、恵ちゃんのところに行くね～」

「何て調子が良いやつ！」

「でも、憎めないんだよね～」

私はボソリと呟いた。

前園の事も考えながら過ごした一週間後の社交界。私は恵様の側近として招かれ、いつもの様に各人と会話を交わしていた。すると、そこに杉浦がバタバタとやって来た。余りにも言葉に出来ないような形相だったので、私は何事が起きたのかと、恵様のところに駆け寄り、そして、一部始終を聞いた。

「霧人が、危篤らしい！無意識界の時空間で、悪夢にやられた！」

私は、え？という表情を作る間もなく、

「何ですって！今は何処に！」

問い合わせてしまっていた。言った後に、心臓がバクバク言って鳴り止まない。こんな事態になつているなんて知らずに、私は此処で何をしているのだろう？前園の顔が頭の中に浮かんだ。

「気になる？」

つて、杉浦が言つた。お前は、こんな非常事態に何を訊いているのだ？しかもお前冷静だぞ、その顔！

「気にならないわけ無いでしょ！あんたの側近なのでしょ？それに、その落ち着いた表情止めなさいよ！」

私は非難した。すると、

「俺は、霧人の主人だけど、あいつは今の仕事に従事してるわけで、どうなるうと、それは霧人の天命。だから……」

言い終わる前に、私は杉浦の右頬にパンチ一つ繰り出していた。杉浦は、思いつきり後ろに吹き飛んでいた。

「何處なの！言いなさいよ！これ以上話したく無いわ！あなたの顔も見たくない！」

私は、杉浦を見下ろす形をとつてハアハア肩で息を付いていた。

「……地球の、あの学校の、保健室」

「判つたわ！じゃ！」

私は踵を返すと、すぐさま地球へ降り立つための時空間の港へと向かつた。杉浦が、頬に手を当てて恵様に抱き起こされながら、舌を出して笑っている事にも気が付きもせずに。

「前園くん！」

時空間を超えて、私は再びこの場所に来た。頭で何も考えられない。こんな気分初めて味わっている気がする。

保健室の、奥のベッドのカーテンが閉じていた。私は、そこに前園がいるのだと確信し、ソッと開いた。前園らしき人が横たわっていた。

「前園！ 聽こえる？ 生きてる？」

頭まで深く体を潜り込ませて いるため、表情が判らない。私は、布団からはみ出していた手を握り締め、もう一度呼びかけた。だけど返事が無い。

「嘘！ ちょっと、『冗談じゃ無いわよ！ 私を置いてさつさとへたばらないでよ！ 私はあんたが好きなんだから～！』

言つた後、ハツと気が付いた。私、前園こと好きなんだ……と。すると、後方から、ドアが開く音がした。

「ふうん。北山さんは、兄さんが好きなんだ？」

一瞬ビクッと体が引きつった。その声は、前園？ ジャア、一瞬に寝て いるのは……？

「ううううん。眠いんですけど。何でしちゃうか？」

私がしつかり手を握り締めて いるのは、前園兄だった。布団から這い出てきて、私の顔を眠た そうな目で見て いる。

私の顔から火が出た。文章にならない言葉が炸裂。

「前園兄？え？ 私、前園が危篤だつて、杉浦が……」

何言つてるんだ？ もう、どうしよう～！ こんがらがつた。視界がクルクル回つて いる。

「ごめん、ごめん。厚史がまた何か言つたんだろう～でも、まさか、北山さんに告白されるとは思つてなかつたな？」

前園は、ちょっと赤くなつて私の横にあるパイプ椅子に腰を掛けた。

「え？ 告白とかそう言つ類じゃなくて……その、今日は天氣良いね？」

何を誤魔化して いるんだろ～？ 口からでまかせじや無いのは判つて いる。私は、心のどこかで、前園の事を好きなのだと自覚して、そして、気恥ずかしさに困惑している訳であつて……

「今日は、良い風が入つてくるよ？」

「……そうだね……」

話を合わせてくれたらしい。一人して、並んでパイプ椅子に座つ

た。保健室の窓から入つてくる風が心地良かつた。でも次の前園の台詞で、私はまた現実に戻された。

「でも、僕から告白しようって思つてたのにな？全く、厚史の馬鹿が！」

「……え？」

お互の目を合わせて見詰め合つてしまつた。

「相手から告白されるより、僕は自分から告白したいんだ。今の聴かなかつたことにしても良いかな？」

「あはは、良いわ。言わなかつたことにするから！」「ごめん！」

思わず謝つてしまつた。私も前園に吊られて視線を落とした。少し沈黙の時間。それは空氣の流れが聽こえるだけのまつたりした時間だつた。

「あの！」

二人して同時に言葉を発した。

「あ、何？」

「え、前園くんから……」

お互い譲りながら、結局、前園が切り出した。

「僕が、一人前の秘密特別捜査隊になつたら、北山さんにプロポーズするから、それまで待つて貰えるかな？待てないとかだったら、仕方ないけど……」

「……え？」

私は、心中で同じ言葉が羅列した。それを言葉で編んだ。

「大丈夫。待つてるわ」

私は、しつかり前園の目を見て言った。

「あ、それと、手。他の誰にも握らせないでくれないかな？厚史との時も感じてたんだけど……？僕はまだ握つたこと無いんだから」

前園は、端正な顔を綺麗に微笑んだ。

空気は一人の世界。それに割り込んできた声。

「ところで君達……わたくしの存在忘れてないだろうか？」

頬杖を付いて横向きに私と前園を見ている前園兄。

「あ、悪い！」

前園は、居たの？って表情で見ていたけれど、私は驚いて、思わずパイプ椅子からずり落ちそうになつた。

「じゃ、未来の妹に何かして貰おうかな～？」

何て思つたりして？」

同じ顔が、微笑んでくれたので、私は引き吊りそうな顔を戻して、「違法じゃ無いことなら何でもおっしゃって下さいな？お兄様？」三人揃つて、爆笑した。

それから、半年経つた。

私は、恵様の元で側近として働く合間に、無意識界の勉強を行つた。あの時言つた前園の言葉を信じていつか、前園と共に秘密特別捜査隊の仕事の手伝いが出来ればなと思つていたりする。

恵様は、相変わらず笑いを絶やさない素敵なプリンセスの道を歩み始めていた。それは、杉浦が、もう、プリンスとしての実力を発揮し始めていたからである。

あ、あの後、杉浦にはきちんと謝罪しました。杉浦は、通信機器で前園にこいつひどく叱られたようだけど、でも、自分はあれで良かつたと思っているらしい。で、時々私を見ると、右頬を押さえる仕草をしてくる。だから、謝つたつてば！

そして、

「あたしと厚史、一年後に結婚するから！」

全く早い事で、もう、式の日取りまで決めてしまつてはいる恵様。何だか寂しい気もするけど、でも素直にお祝いしたい気持ちも有る。「で、思うんだけど……暫くの間、絵夢にはあたし付きのメイドさんやつて欲しいの」

と言つ事で、話は纏まつた。私は、アカンシャスで生活する間、恵様から悪夢を補給しなければ生きて行けない体だから。きっと、前園と結婚するまでの保険と言つ事なのである。私は、勿論恵様

の行為を仇で返すつもりはない。その分シッカリ働かせていただきます。

そんな甘~い日々が過ぎていった。

そして、結婚式の当田はやつてくる。

「恵様の晴れ姿、この日で見れて光榮です」

私は、仕度されている恵様の手伝いをしながら最期になるつて訳でも無いのに、言葉を掛けた。

「あたしも、絵夢には色々なものを貰つたわ。貴女がいなければ、今のあたしが居るなんて思えないものね?」

不思議に思つていたこと。一体私は、恵様に何を差し上げていたというのであるうか?

「私は……恵様に貰つていただけですよ? 一体何を私は差し上げていたとおっしゃるのですか?」

そう、杉浦も言つっていた。何を?

「友情と、愛。そして、信じる心」

そう言つて笑つてらつしゃる。

「それら全てが、心の支えになり、そして安心できたの。ありがとう。絵夢?」

私に、そんな大それた物を求めてらつしゃつたの? で、私はそれにちゃんと応えていた? そう思うと、涙腺が緩む。

「式はこれからよ? 泣かないでよ~絵夢?」

そう言つて慰めてくれた恵様は、アカンシャスーのプリンセスだと私は思った。

式は、華やかに行われた。蝋燭とライトと、伝統的なものと今風な物を取り揃えた、豪華で可憐な結婚式。

アカンシャスの闇が此処から消え去るかと思えるくらい鮮やかであつた。

私は、この日のために一度帰還した、前園と一緒にこの式を見守

つた。

「お久しぶり」

「うん。元気にしてたかい？」

取りとめの無い言葉を交わして私達は、こゝそり手を繋いで見守つた。

そして、この豪華な式が終わりを告げようかといつ頃に、「後一年で、秘密特別捜査隊の仕事で一人前になれるみたいなんだ、それまで待つてくれ」

と、前園はこゝそり耳打ちした。それを聞いて、私は、

「勿論よ！私もそれなりに勉強し終えることが出来るから、待つてね？それから、地球に移住したら、寄りたいところがあるの」「何処だい？」

「父のお墓」

前園の耳元で囁いた。

私は、母には会えないけれど、父には、お墓であろうと行くことは出来る。

「君のお父さんなら、僕の叔父さんだ。勿論案内してくれよ？」

私達はお互い顔を見合させて笑つた。

そこにケーキが運ばれてきた。どうやら、此処に出席している者達にも配つている様子であった。そして、アナウンス。

「このどれかのケーキの中に、指輪が一つだけ隠されます。それを引いた方が、次の幸運を掴む者達です。それではご賞味あれ！」

司会がそんな事を言った。

「見つかったら最高ね？」

「そんな偶然有つたら、面白いけどね？」

二人同時に頬張ったそのケーキの中には、指輪が隠されていた。

「あ……」

私と、前園は同時に声を出した。

「入つてた……」

「私も……」

私は、前方に視線を向けた。恵様が遠くで笑つてらつしゃつた。
そして、

「次の花婿、花嫁に幸あれ！」

その声が、アカンシャス中に、そして、私の中で木靈していた。

世界よ幸あれ。そして、愛よ永遠に……

#5 永遠の愛（後書き）

さりげなく、女の子はアルファベットの名前。
此処拘つてたり。

男連中は普通なのですが・・・

夢の世界って不思議だなって想つんですね。

でも、どうなんだろう？悪夢って実は良い意味合いで物も有るんで

すよね。その辺りは描いてません。

それでも、皆が幸せな世界になつたいただければ幸い。

また、色々とこゝにしていきますので、お付き合いくを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176d/>

アカンシャス・ワールド

2010年10月8日14時48分発行